

『法界』より抜粋

8、浄土真宗の教範

浄土真宗の判教は、二双四重であつて

豎出、俱舍、成実、法相、三論

豎超、華嚴、天台、真言、禪宗

横出、浄土仮宗（觀經、小經）

横超、浄土真宗（大經）

これに一代仏教は網羅してあるけれども、横超の直道に流れを汲み、浄土真宗に加盟はしていても、心眼を開かずに、解釈、了解しただけであつたら、机上の空論であり画餅に等し

いものである。

浄土真宗の教範は、三三の法門（六三分別）によって真仮の分際を分別して教導しなければならぬ。それが聖人の真意である。

一、三願

第十八願は、四十八願中の王本願、随意の本願であつて、絶対他力、不思議の本願で、八万の法蔵の終歸する処である。

本文は「設ひ我仏を得んに、十方の衆生が、至心に信樂して我国に生れんと欲し乃至十念せん、若し生れずは正覺を取らず、唯五逆と正法を誹謗した者は除く」

第十九願は、随他意の願であつて、我々は自力の機執が離れ切らないから、十方衆生を方便誘引せんが為にこの願を建つ。

本文は「設ひ我仏を得んに十方の衆生、菩提心を発し、諸の功徳を修し、至心に発願して我がくに生れんと欲せん。寿終のときに臨みて、仮令大衆と圍繞してその人の前に現ぜずは正覚を取らじ」

第二十願も随他意の願であつて、自力修善の成就し難きを知つて、善本徳本の名号に帰入せしめて、果遂せしめんが為にこの願を建つ。

本文は「設ひ我仏を得んに、十方衆生、我が名号を聞き、念を我国に係け、諸の徳本を植え、至心に廻向して我国に生れんと欲せん、果遂せずは正覚を取らじ」

随自意の第十八願を以て、十方衆生を絶対他力の不思議の力で、本形のままを救済しよう
とされても、根機がまちまちで機受の信相が悉く相違するから、平等の証を開かすことができない。それを調整するためには、墓石でもはじめから磨きは掛けない、凹凸を平面にし

て、次にはコツコツ刻んで後に磨き上げるように、第十九願の法は修諸功德の自力、機は至心発願の自力を励まして善因善果、悪因悪果の道理を教え、定散の自力を策励させてみて、その成就し難きを自覚さし、一步前進せしめて、第二十願の法は植諸徳本の他力、機は至心廻向の自力の半自力半他力の桁に入つて、法の尊高を弄んでいるけれども、機の満足を得ない事は、恰も飢餓を我慢して御馳走を眺めている如く、何時食べさして頂くのかと問えば、死んでから、との答えでは、平生業成でもなければ現生不退でもない事に驚いて、実地の求道を始めて猛進さして頂くのが、果遂の誓いに乗っているのだ。最後は自己の無能に驚き、逆謗の屍が自分である事を知らされ、唯除五逆誹謗正法と切り墮とされた時と、撰取された時は同時であつて、捨自歸他、機無円成の、機は至心信樂の他力、法は乃至十念の他力、機法俱頓の極致に到達さして頂くのである。

然るに世の中の多くの人々は、名号に向いておれば皆第十八願の機類と心得、宿善の有

無、厚薄にはお構いなく、皆信後の真似をさして有難がるのを信仰と心得ているのだ、唯悪いものをお助け、十劫の昔に助かっているのだと十劫秘事を平気で主張し、罪の自覚もなければ摂取された歓喜もない。三品の懺悔もなければ広大難思の慶心もない。後生を丸呑みにしているのだから、治らないのが自性と平気で下痢しているのだ。

蓮如上人も宗祖の三願転入の趣入の如く、領解文に聖人一流の御勸化の趣きを、もろもろの雑行（第十九願の修諸功德） 雑修（第二十願の植諸徳本） 自力の心（第十九願と第二

十願の桁にいる時は、みな自力の心が去ってはいないのだ、信樂開発していない人はみな他力の真似をして、他力廻向のように説明はしていても自力の機執は去っていないのだ。

疑い（自分の心で善し悪しを分別し、計らうている時は仏智に任していないのだから、疑いだ、自分の機を眺めた時に、どうも、ひよっと、けれども、これでよいかしら、ああは仰るが、と二の脚ふむ心があればみな疑いだ、それを見ると手間が掛かると脇目をさしているだ

けだ、その疑いのあることさえも知らずに、素直に聞いていると誤魔化してお浄土に暴れこもうとしているのだから、真宗が滅亡するのが当然だ）を振り捨ててと言われてあることが、三願転入の相を顕しておらるるのだ。仏智無辺のこの願海、深遠微妙なこの妙法、善巧撰化の巧方便、一願建立からすれば、第十八願、巻き上ぐれば六字の名号、開けば五願開示の教、行、信、証、真仏土となり、聞損すれば、化身土巻の第十九願、第二十願の機類となる。速かに方便権門を去って、真実弘願の深法を諦得せよの指示、仰ぐべし信ずべしではないか。

真仏土巻に「すでにもって真仮みなこれ大悲の願海に酬報せり。ゆえに知んぬ、報仏土なりということ、まことに仮の仏土の業因千差なれば土もまたまさに千差なるべし、これを方便化身土と名づく、真仮を知らざるによりて、如来広大の恩徳を迷失す」

和讃に、
一代諸教の信よりも

弘願の信樂なほかたし

難中之難とときたま

無過斯難とのべたま

念仏成仏これ真宗

万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして

自然の浄土をえぞしらぬ

念仏にも、万行随一の念仏（第十九願の中の念仏は、諸善万行の出来ない人はこの念仏が修し易いから入れという、逃げ道の念仏だから、万行より劣っているように見える念仏である）もあれば、万行超過の念仏（第二十願の念仏で、万行に堪えない機を救うのだから、万行よりも勝れていなければ劣機が救われないと気がついて、名号の尊高を仰いで称える念仏である）もある。更に進んで自然法爾の念仏（第十八願の念仏は、法が機に生き機が法に生きた、撰取された後の報謝の称名である）もある。その区別も知らないで、念仏と言えば、皆十八願の一法のように心得、真宗の門徒と言えば、皆十八願の行者と鵜呑みにして

いるのは、明らかに祖師の三願真仮の妙判を無視しているものである。

二、三經

第十九願の解説が觀無量壽經である。この觀經は釈尊一代仏教を觀の一字に納めて自力より他力に向わしめ、廢觀立稱する重大な役割を持つ經である。

即ち華嚴經は釈尊の自内証の經で、高遠の真理を説かれるから大衆は如聾如啞、それで程度を低めて四十年間調機誘引されたのが、阿含、方等、般若の諸經である。愈々上根大衆の為に金色の姿をして法華妙典の説法の最中に悲泣雨涙の請いに応じて、王宮に降臨し給うは、為凡の經を説く為であり、自力の修行より他力の乗托すべき事を顕すのである。觀經を説き終わって靈鷲山に帰り、残りの經を説かれたから、法華と念仏は同時の經である。最後に涅槃經が説かれてあるが、これを豎に浄土の三部經と合すれば、華嚴經と

大無量寿経、法華経と観無量寿経、涅槃経と阿弥陀経。これを横に並ぶれば一代仏教は巻き上げられて、自力出世本懐の法華経に納まり、法華経の説法を中止して韋提希の為に十三の観法を説き、更に九品の散善を説いて、口には言わねど韋提希よ、定善、散善が出来るかいと心の奥まで覗き、今韋提希の心の中では実子の阿闍世まで八つ裂きにする悪性が下々品であることを知らしめ、第九の真身観の仏は、光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨するのだと、廃観立称して悪人正機の大慈悲を發揮するのだから、観経を機の真実を顕す経と言うのである。

常随の阿難も釈尊の真意を計り兼ねて、釈尊よ始めに定善を説き、後に散善を顕し、最後に念仏を宣説しておられますが、この経の真の目的は何でございますかとの問いに対して、汝この語を持って、この語を持つとは、無量寿仏の御名を持つと言う事だと教え、その持ち方が阿弥陀経に教えてあるのである。

第二十願の開設が阿弥陀経である。これを小経とも言う。この小経は初めに極楽の莊嚴を説き、後に諸仏の証誠を説示してあるが、真中の一段が觀経と同様、隱顯の説であつて、浮薄の浅機に対しては名号を策励する自力の称名となり、宿善深厚の頓機に対しては他力微妙の法となるのである。

舍利弗、若善男子善女人、聞説阿弥陀仏、執時名号若一日乃至若七日一心不乱、其人臨命終時、阿弥陀仏与諸聖衆、現在其前是人終時、心不顛倒即得往生、阿弥陀仏極楽国土。

自分の信仰の程度でこの経を味わうから、これだけの文字で三宗が開けるのだ。執持名号若一日乃至若七日一心不乱に固執したのが浄土宗となり、其人臨命終時に全力を注いだのが時宗となり、聞説阿弥陀仏を諦得したのが浄土真宗となつたのである。

聖人の腹で読めば若善男子善女人は十方衆生、聞説阿弥陀仏は聞其名号、執時名号は撰
取不捨、若一日等は念相續を顕し、一心不乱は無他相問雜、其人臨命終時は心命終、
阿弥陀仏等は親縁近縁雜上縁、聞損すれば方便に桁を落とす、如実の聞なれば第十八願の
聞に通ずるので、要は行者の信仰の程度で極致に趣入せしむる果遂の誓いの開設の経であ
る。

第十八願の開設の経が大無量寿経である。上巻には法蔵菩薩の大願成就の因果を明か
し、下巻に衆生が聞信の一念に大法を領受して成仏する、往生の因果を説き、真諦門決定の
上は五善五悪を説いて勸戒する俗諦門が説示してある。

聞いて知って成程と合点することは易いけれども、唯除逆謗と除かれているのが自分だ
と自覚される事が至難であり、言葉を離れた深妙の仏意を諦得ささるる事は極難である。

大経末に

如来興世難値難見 諸仏經道難得難聞 菩薩勝法諸波羅蜜 得聞亦難遇善知識 聞法能

行此亦為難 若聞斯經信樂受持 難中之難無過此難

と僅か四行に九字も難の字が並べてあるが、易信難行の聖道門の三僧祇百大劫の修行と、難信易行の浄土門の間とは平均するのだから、一通りの聞き方では廣大難思の慶心は得られない。

要は八万の法蔵を自力の出世本懐の法華經に納め、觀無量壽經の觀をくぐらし、廢觀立稱して小經に送り、嫌貶開示し、調機誘引して果遂せしむる善巧摂化に驚かすにはいられない。素直な真似している善男子善女人も弘願の座敷に這入ろうとする時、始めて唯除逆謗と捨てられた絶対の下機が自分である事を知らされ、誓願不思議に信順して、他力の出世本懐の大經の真髓たる名号と一体となり、生死の苦海が光明の広海と転じた感謝の生活となるのである。

三、三蔵

第十九願を福德蔵というのは、少善根福德の因縁という文字からくるので、物柄は觀經開設の定散二善、三福九品の諸善万行で、善導はこれを雜行といわれたのである。自力の根性が捨たらないから自分は修諸功德し得るものと自惚れ、他力の念仏は甲斐なき者の修すべき行とさげすんでいるのである。

第二十願を功德蔵というのは、不可思議功德の功德から来るもので、小經に不可以少善根福德因縁と定散二善を嫌貶し、多善根多福德の名号を開示しているけれども、極致に到達し得ない機類だから雜修の域を離るる事ができない。

第十八願を福智蔵というのは、仏智の不思議を聞信し、眞実の智慧を諦得さして頂いて、福と徳とを合撰する智慧なるが故に福智蔵という。

この三蔵も前の二つは方便蔵で後の一つが真実蔵であって、化巻の要門下には、「釈迦牟尼仏、福德蔵を顕説して群生海を誘引し、阿彌陀如来もと誓願を発して普く諸有海を化し給う」と、化巻の真門下には「釈迦牟尼仏、功德蔵を開演して十方濁世を勸化し給う、阿彌陀如来もと果遂の誓いを発して群生海を悲引し給う」

誘引し悲引するのは真実に誘導せんが為であって、行巻の結歎の文には「能く三有繫縛の域を出で、能く二十五有の門を閉ず、能く真実報土を得しめ、能く邪正の道路を弁ず、能く愚痴海を竭して、能く願海に流入せしむ、一切智船に乗ぜしめて諸の群生海に浮かぶ、福智蔵を円満し、方便蔵を開顕せしむ」とあって、三願転入の深意が発揮してある。

仏凡一体、機法一体の極致に趣入する過程であり、無上涅槃、一乗究竟の極理に到達する道程であるから、諸善万行、定散二善の雑行も、実地に修行すれば因果の道理としてその利益は有るのだ。その成じ難きを知って、他力の名号に眼をつけても、自力の機執が浄尽

出来ないことを知るのだから雑修も大いによし。聖人も二十カ年の修行をやり抜いて自己の無能を知り、「ようように計らいあうて候こそおかしく候」とは、計らいつきた後のお言葉だから、我々も計らうて計らいつきて親に計らわれていた事に呆れた時、他力に乗托するのだから実地に求道するがよい。実行せずにお言葉の真似をしているのは、真似であって実地に体験にはならない。

聖人は私たちの身替わりだと言って投げやりになっているが、後生は一人凌ぎと言う事を知らないのだろうか。「五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなり」と仰せられてあって、末代の同行の身替りに修行したとは一言も言っていない、聖人は生命懸けの修行をした先覚者なのだ。道俗よ、自惚れてはならないぞ。自己の無能を知れ、下々品が自分であり、唯除逆謗と捨てられたのが自分であり、この機を一度は一度はと念力を注いで下さった他力廻向の賜物によって、不可思議の願海に帰入する事ができたのだ。大千世界

に満てらん火をも過ぎ行きて聞けと叫び続けて下さる先覚者なのだ。それに聖人に実地の体験をさして、自分達は素直な真似をしてお浄土に暴れ込もうとするのは無理だぞ。

この方便蔵を頭で合点して通った者は、福智蔵も曖昧な聞き方をしている。演習と実践とは違う。話と実際とは違う、苦しきのない人には嬉しきはない。その人その人の程度で味わうのだから皆本当だが、総てを感謝できる境地まで進まなければ、如来聖人の思召しには契わない。

福智円満な名号ではあるけれども、仰いでいるだけで領受しなかったら自分のものではない。仏智が満入したのなら、神通自在、無碍自在、一切の有碍に障りなしの境地でなければならぬ。

同行よ!! 雑行雑修と嫌うて諸善万行の善根も修せず、自力になるといつて名号一行も

策励せず、弘願他力には到達せず、第十八願の福智蔵に入った積りで観念の遊戯をしていて、それで五十二段が超証できると思っているのかい。名号六字と一体に成る迄求道する事を知らずに、自分の機を包むことばかりに腐心しているのは自力の機執の親玉なのだ。それを聖人は「悲しいかな、垢障の凡愚、無際より已来助正間雑し定散心雑るが故に出離その期なし。自ら流転輪廻を度るに微塵劫を超過すれども、仏の願力には歸し難く大信海には入り難し」と仰せられたので、自力を自力と知らずに永劫流転を続けているのだ。

四、三門

第十九願を要門という。門は出入りの出来る処、通入する処である。八万の法蔵がこの要の門を通って、他力不思議の境地に通入するのである。第十九願の修諸功德は観經の開説に於いて定散二善と分かち、定の息慮凝心を十三觀に明かし、散の廃悪修善を九品に分かちて、八万の法蔵をこの二善に納めて、第九の真身觀の仏は下三品の劣機を撰取不捨する

大慈悲を顕し、廃観立称して、これを阿難に付属して真門に送る。

第二十願を真門と言う。真実と言わず真門と言うは、廣大無辺の真理の境地が有るからそこに遅滞せしめず、果遂せしめんが為に門の字を使用する。定散二善の少善根の福德の因縁を以ては彼の国に生ぜずと嫌貶し、念仏を開示すれども、定散の機執を浄尽することを得ないから、若一日若七日と、自力を策励し来迎を期するのである。

第十八願を弘願という。唯除逆謗と捨てられた極悪最下の機類が、若不生者の誓願たる極善最上の法に生かされて、善悪を超越せられた廣大難思の慶心に満悦し、仏凡一体、機法一体、本願や行者、行者や本願の信仰の極致に達した、信仰の儘の生活、生活の儘の信仰となるのである。

同行よ!! これは要門から真門を通じて弘願に趣入する道程を教えたもので、ははあ成程

と合点し、八万の法蔵が要門を潜り、他力の名号に着眼したのが真門で、他力に乗托したのが、弘願の座敷に坐らして頂いたものだ。と領解ができたのを、信順無疑の第十八願の行者と自惚れたら大間違いだ。これは知解の分際、学問の領域、觀念の遊戯、自心建立の心であつて、他力不思議の信仰ではない。学問の定規を知るのは結構であるけれども、知つたのは学問であつて信仰ではない。間違えなさんなよ、あなたは法文に眼がついただけであつて、久遠劫からの自性、衆生本分の機は頭を頭してはいないのだ。尽未来際まで流転を続ける逆謗の屍は首を出してはいないのだ。三世の諸仏が呆れて逃げた無明業障の恐ろしい病はのぞいてはいないのだ。うんともすんとも言わない梃子に合わない御本尊は見えてはいないのだ。

同行よ!! 信仰は難しいものだ。話が判つたのでは救われたのではない。話では救われな
いものがある。機を見る者は異安心。異安心でもよい、無いものを出せとは言わない。有る

ものを有ると見なさい。三世の諸仏が呆れて逃げた衆生本分の機を狙うた若不生者の誓いだから、それが出て来なければ、悪人正機の的が外れるのだ。その機は十劫の昔に救われている、南無は機の方、阿弥陀仏は法の方ではないかと、十劫秘事を平気で宣説してはならないぞ。一念の信が徹底しなかったら、無帰命安心だ、晴れたか、満足出来たか、開発したか、攝取されたか、死んで助かる宗教なら平生業成ではないぞ、何時とはなしに救われる宗教なら、唯信独達ではないぞ。

同行よ!! 他力廻向のお育てを蒙って愈々心の臨終が迫って来れば、三世の諸仏に捨てられた劣機が頭を上げて来るぞ。見せて頂くのが果遂の誓いの願功なのだ。調熟の光明のお育てなのだ。照らし出されて三定死の境地に立ち、実地に泣いた者でなければ、実地に攝取された不可称不可説不可思議の信樂は諦得出来ないぞ。弘願の広い天地は凡夫の思慮分別を外れた処に有るのだ。「遇い難くして今遇うことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得た

り」と讚嘆せずにはいられない大慶喜の世界が有るぞ。

五、三機

第十九願の機類を邪定聚の菩薩と言う。菩薩とは菩提薩埵と言って、生死の苦海の恐ろしさに驚いて求道する行者のことを言っているのだ。機は下根下劣の泥凡夫でも法の徳から菩薩と言えるのだ。この機類は自分の能を知らず、定散二善に堪え得る者と自惚れて修行をしているから、邪に定まる機と言うのだ。

第二十願の機類を不定聚の菩薩と言う。善本徳本の他力の名号に鞍替えはしたけれども、定散二善の機執が去らないから、法を眺むれば往生は一定の思いに住し、機の醜さを見れば往生不定の思いに住するから、不定聚の菩薩と言い、大抵この境地に沈滞低迷しているのだ。機を見れば千年経っても夜は明けないと、明けていない人が明けた積りで言っているの

だから、滑稽を通り越して気の毒なのだ。この機を包んで素直な真似をしてお浄土に迂り込もうとしているのだから、千年経っても不定聚の域を脱する事が出来ないのだ。

第十八願の機類を正定聚の菩薩と言う。三千世界の者は皆助かって、私一人は助かる柄でなかったと、往生の望みの綱の切れた逆謗の屍が、誓願不思議に貫かれた一刹那、三千世界の者は皆墮ちても私が参らなければ親が泣くと言う大自覚を得た時を、信受本願前念命終（正定聚の数に入る）即得往生後念即生（これは是必定の菩薩なり）と言うのである。正定聚の菩薩にさして頂かなければ仏にはなれないのだ。凡夫のままで行く処は三悪道だけだ。信樂開發さされた一刹那に仏智が満入して仏凡一体になっているのだから、機相から言えば下々の凡夫でも体徳からいえば正定聚の菩薩だ。二種一具だから地獄一定でない人は極楽一定ではない、大懺悔のない人には大歡喜はない。二種深心の徹底した人でなければ一念の信の自覚はない。自覚のない人は慈悲の極致を究めていない。実地の体験のない人で

合点^{がってん}した^{ただ}け^{では}、自身^{じしん}建^{こん}立^りの^{ひそ}皮^{そう}相^の信^{しん}に^す過^ぎぎ^{ない}の^だ。

同行^{どうぎょう}よ!! あなたはどの^{けた}桁^にお^られ^ます^か、自^じ分^{ぶん}に^は判^わら^ない^でし^よう。花^{はな}でも^{つぼ}蓄^みも^あれ^ば、開^{ひら}いた^と時^きも^あ有^あれば、散^ちつ^た後^のち^もあ^る、求^{きゅう}道^{どう}でも^{けん}研^{きん}究^{きゅう}的^{てき}の^{もの}者^もお^れば^き享^{きやう}楽^{らく}的^{てき}に^し死^し後^ごを^た楽^たし^む者^{もの}も^いる。習^{しゅう}慣^{かん}的^{てき}に^{さん}参^{さん}詣^{けい}する^{もの}も^おれ^ば必^{ひつ}死^しの^き求^{きゅう}道^{どう}者^{しや}も^いる。合^が点^{ってん}した^のを^{しん}信^{こう}と^{おも}思^{おも}つ^てい^る者^{もの}も^おれ^ば、学^{がく}問^{もん}した^のを^{しん}信^{こう}と^こ心^{ころ}得^えた^{もの}者^もも^いる。煩^{はん}悶^{もん}して^いる^{もの}者^もも^おれ^ば開^{かい}発^{はつ}した^者も^いる。その^{ひと}人^はその^き境^{きやう}地^ちしか^みえ^ない^のだ^から、英^{えい}国^{こく}の^し詩^し人^{じん}マ^ーチ^ンが^ひ彦^{ひこ}根^ね城^{じやう}に^の登^ぼつ^て者^{もの}も^いる。小^{しょう}人^{にん}は^び琵琶^{わこ}湖^みが^みえ^る、大^{だい}人^{じん}は^に日^{ほん}本^が見^みえ^る、偉^い人^{じん}は^せ世^{かい}界^が見^みえ^る」と^{たい}大^{ろう}老^を讚^たえた^が、小^{しょう}人^{にん}は^わ我^が機^き包^つんで^し死^し後^ごを^た楽^たし^む、大^{だい}人^{じん}は^わ我^が機^き離^なれて^{がく}学^{もん}を^た楽^たし^む、偉^い人^{じん}は^わ我^が機^き通^{とお}して^{うち}宇^{ゆう}宙^{ちゆう}を^た楽^たし^む」

同行^{どうぎょう}よ!! 諸^{しよ}善^{ぜん}万^{まん}行^{ぎやう}の^じ自^り力^きで^{おう}往^{じやう}生^{じやう}し^よう^とは^{おも}思^{おも}つ^てい^ない^が、そ^れか^と言^いつ^て現^{げん}生^{しやう}不^ふ退^{たい}の^き境^{きやう}地^ちに^{はい}入^{はい}つ^ては^いな^い。丁^{ちやう}度^どど^ちら^らに^も入^{はい}ら^ない^ふ不^ふ定^{じやう}聚^{じゆ}の^き機^なの^だ。他^た力^{りき}の^み名^{みやう}号^{ごう}に^め眼^めが^つ

いたのは誠に結構であるけれども、自力の機執が除かれていないのは誠に残念である。その証拠は自力を働いたこともなければ疑うた事もないのだから、真剣さもなければ晴れた境地も御承知ないのだ。悪いものをお助け、死んだらお助けで、片付けているのだから、痛くもなければ痒くもない、有難くもなければ嬉しくもない。唯素直に話を聞いて死後を楽しんでいられるだけだから、この世の開發の歡喜は全然御承知ない。でも今頃は現在の救済を説くようになった事は進歩したのであるけれども、一念の信が抜けているから、小僧の豆腐買いに終わる事は残念である。法に眼がついて喜ばれる時は、これこれと有頂天になり、機の醜さが見えて、こんな心がでるようではと悲観している時は往生に不安を感じている。自分の心の善し悪しで往生を決めている自力とも知らず、不安の有るのを疑いとも知らず、機を見るなど包んで有難がつているのだから、信仰の程度は幼稚園位のものだ。広い天地が有るぞ、自由の天地が有るぞ、その境地まで進みませんか、宗祖七百回忌の記念に!! 南無

阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。聖誕八百年に溝さらえをしよう。

六、三往生

第十九願の桁にいる邪定聚の機類の往生は双樹林下往生とて、釈尊入涅槃の時のような淋しい分れをしなければならぬ化土往生である。

第二十願の桁にいる不定聚の機類の往生は、難思往生とて第十九願よりは一歩進んだ往生であるけれども、第十八願の難思議往生には及ばないので、議の一字が省かれてあるのだ。

第二十願の行者も化土往生である。化土はそんなに沢山あるのかと言えば真仏土巻に「まこと化の仏土の業因千差なれば土も復千差なるべし」と仰せられたように、各自の顔容が違うように、心が全部違うから、日々の生活の業因がまちまちだからその結果は千差万別である。疑城胎宮、懈慢辺地、七宝宮殿、胎生、胎宮、この人世に生れても、同じ人間であり

ながら果報が全部違うように、化土に往生してもその人その人の修因に応じて感果を得ているのである。

世の中には疑心の善人が化土往生するのであって、我々如きの疑心の悪人は化土には到底行かれないから、他力で報土往生させて頂くのだと、話だけは立派に覚えている人も有るが、疑心の善人とは、そう言っている人を言っているのだ。口では悪人と言いながら、素直に聞いていると自惚れているのが善人だ。開発していないから疑心なのだ。機相から言えば化土までも影のぞきも出来る柄ではないのだ。法の徳から善を修すれば修した徳が顕れ、名号を称えたらば称えただけの徳が顕れて、調機誘引して死んだ時、その人の進んだ処の結果が顕れるから千差万別の果報と言うのだ。機執の去らないものが、報土往生が出来るものかい。化土にも行かれない位の者がどうして報土往生が出来るのだ。それは自力は難しいが、他力だから易いのだ、何を仰る、極難信とお聞きになった事はありますか。お経やお

聖教をお読みになつた事はありませんか、自分の氣に合わない処は読まないでしよう。

久遠劫からの自力が捨たらないから、第十九願や第二十願で育て上げて、第十八願の境地まで果遂せしむるのが調機誘引と言うのでしよう。他力の真似をする人は多いが他力不思議を諦得した人は稀である。「真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚だ以て稀なり。疑なる者は甚だ以て多く、虚なる者は甚だ以て滋し」兵児担ぎは多く横綱は少なく、僧侶は多く勧学は少ない。俳優は多くスターは少なく、門徒は多く開発した者は稀なのだ。

第十八願の桁にいる正定聚の機類の往生は難思議往生とて、心も言葉も絶えた不可称不可説不可思議の信樂の結果である報土往生である。真宗では第十八願の抑止門を軽視してゐるけれども、あれが悪人正機の根本だから、光明に照らされたら逆謗の屍が見えて来なければならぬのだ。觀經では、定散二善を勧め、小經では善本徳本の名号を勧発しているのだ、善男子善女人と調子に乗せて励ましてあるが、大經に来て、唯除五逆誹謗正法と切り

墮おとしてあるのは、自己じこを知れと自惚うぬぼれを指摘してきして悪人正機あくにんしょうきの深意じんいを發揮はつきしてあるのだ。それを見るのでないと包つつんでおいて、法の尊高そんこうを仰あおげと教おしえているのは第二十願だいにがんの桁けたであつて、実地じつちの求道きゅうどうにならないから、実地じつちの体験たいけんにならないのだ。悪い者わるものだと話はなしを覚おぼえただけで、真しんの懺悔ざんげにならないから、真しんの歡喜かんぎにならないのだ。徹底てつていした悪あく、すなわち唯除逆謗ゆいじよぎやくほうと切り墮おとされた劣機れつぎが、若不生者にやくふしょうじゃに攝取せつしゆされた一刹那せつな、八万はちまんの法蔵ほうぞうを詮せんじつめた名号みょうごう一法いつぽうと、機ぎ毎ごとを詮せんじつめた逆謗ぎやくほうの一機いつぎとが火花ひばなを散ちらした一刹那せつな、二種深心にしゆじんしんの徹底てつていした一刹那せつな、機ぎ無円成むえんじょうで名号みょうごうを全領ぜんりょうしているから、法然ほうねんも親鸞しんらんも法龍ほうりゅうも同行どうぎょうも一味平等いちみびやうどうの報土往生ほうどおうじょうの証果しょうかを獲うる事ことが出来できるのだ。

真宗しんしゅうでは化土けどの教化きやうけをする人ひとが殆ほとんどいない。素直すなおに聞きかして頂いたいだ者ものは真実報土しんじつほうど、信心しんじん獲得ぎやくとくしない者ものは皆地獄みなじごくと言いつて、化土けどに生うまれる者ものは善人ぜんにんで、我々われわれの及およぶ処ところでないと言いつているが、それでは弥陀みだの深旨じんしも、釈尊しゃくそんの本意ほんいも、親鸞しんらんの真意しんいも味得みとくしてはいないではないか。

何故か、我々は久遠劫からの機執が一朝一夕で浄尽するものではない。だから聖人は「助正間難し定散心雑はるがゆえに出離その期なし、自ら流転輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に歸し難く、大信海に入り難し」と仰せられ、種々に善巧方便し、調機誘引して果遂せしめるのが、果遂の誓いの第二十願の願功である。だから終歸する大涅槃の境地に到達せずして途中で倒れた者が化土往生であって、仏智に攝取された者が報土往生だ。結果から言えば報化二土であるけれども、原因から言えば専雜の得失が分れる訳だ。その得失は名号と一体に成ったか聞損したかで決まるのだ。その極意は信一念が諦得出来たか出来ないかで、信後か信前か、悟りか迷いか水際が鮮やかに立つのだ。これが浄土真宗の極意、唯信独達の法門と言えるのだ。その境地に到達しないで機毎機毎で受け取って死ぬるか、進んだだけの原因の結果が出て来るから千差万別の化土が展開するのだ。

末灯鈔に「仏恩のふかきことは、懈慢辺地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、弥陀

の御ちかいのなかに、第十九第二十の願の御あわれみにてこそ、不可思議のたのしみにあふ
ことにて候へ、仏恩のふかきこと、そのきはもなし、いかにいわんや、真実の報土へ往生し
て大涅槃のさとりをひらかんこと、仏恩よくよく御案ども候ふべし」と仰せられてあるでは
ないか。一念の信の獲得出来ない、聞損の機類は、化土に往生さして頂いて、三宝を見聞す
る事の出来ない不了仏智の罪を懺悔さして頂いて、後に報土に趣入さして頂くのだ。それを
若し信仰が徹底しない者が皆三悪道で苦患を受けるのだと教えれば、弥陀の調機誘引の慈悲
も知らなければ、聖人の三三の法門も無視している事になるのだ。

同行よ!! 八万の法蔵を三三の法門で撰別し、唯説弥陀本願海に歸せしめ、往相廻向の
利益には還相廻向に廻入せり、往還の廻向は他力に由る、この一代仏教の大精神、仰ぐべし
信ずべし。